

サボテンの基本的な育て方

イボサボテンの増やし方

①大きめのイボを切り取ります。小さいと発根するまでに干からびてしまうものも少なくありません。



②乾燥させてからさし木用土に、倒れないように少し埋めてさし木します。



つぎ木

つぎ木は成長の遅いものを旺盛な台木の力を借りて早く育てるためや、栽培が難しい種類の貴重な種を保存させたいとき、根が腐りはじめて枯れてきているものを助けたいときなどに行います。

- ・時期 4～8月。雨が続くときはやめたほうが無難です。
- ・台木 柱状種(竜神木・三角柱・袖ヶ浦・黄大文字等)、エキノブシ(短毛丸・花盛丸等)がよく使われています。

つぎ木の方法

①台木は成長点なくなる部分より下を、切り口の周囲を斜めにそぎます。



③台木の切断面をさらに水平に薄くそぎ、台木と穂を合わせ、離れないように糸をかけます。



②つぎ穂を水平に切り、穂の切り口も斜めにそぎます。



④しばらくはそのままの状態強い日光から避け、乾燥気味の場所に置いておきます。糸は1週間ぐらい経ってから、慎重に、トゲに引っかかりたりしないようにはずしてください。糸を取り終えたら、しばらくはつぎ面に水がかからないようにして管理すれば大丈夫です。

いろいろなつぎ木

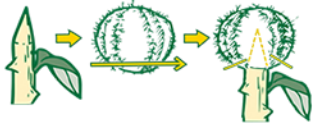
<部分つぎ>
イボや穂といった球体の一部分を接ぐ方法です。



<逆さつぎ>
穂の根の部分を上にして接ぐ方法で、子を取るときに用います。



<宝剣つぎ>
空キノの硬い部分の先端を鉛筆のようにとがらせ、穂の株に切りこみを入れ、そこに突き刺し、穂がずれないようにピンで止めておきます。



ここがポイント!

カニ・シャコバサボテンのつぎ木

木の葉サボテン(台木)



カニサボテンまたはシャコバサボテン(穂木)

この部分の薄皮の両側をそいでおきます

ウチワサボテン(台木)

切りこみを入れます

虫ピンなどで止めます



虫ピンなどで止めます



4～5月に元気な枝先を2～3節、節のところから切り、2～3日陰干してからさし木床(パーミキュライトや小粒の鹿沼土、赤玉土)にさします。水は半月ぐらいいは控えたほうがいいでしょう。発根したら、水を少しずつ多めにして、徐々に日光にならすようにしましょう。また大きい株にしてたくさん花をつけさせたいときは、イラストのようにさし穂を少し大きめ(3～4節)に切り、これを3本背中合わせにして、水ゴケで巻いて輪ゴムで止めます。それを4号鉢の真ん中に置き、そのまわりに水ゴケを詰めてください。発根して育ててくれれば三方に垂れさがり、秋にはある程度の株になります。

サービスのご案内



配達 切り売り商品 修理

●下記クレジットカードがご利用できます



返品・交換 表札、額の受注 スペアキーづくり

☐はギフト券もご利用いただけます



制作発行/株式会社セキチュー 販売促進課
〒370-1201 群馬県高崎市倉賀野町4531-1

TEL.027-345-1111(大代表)

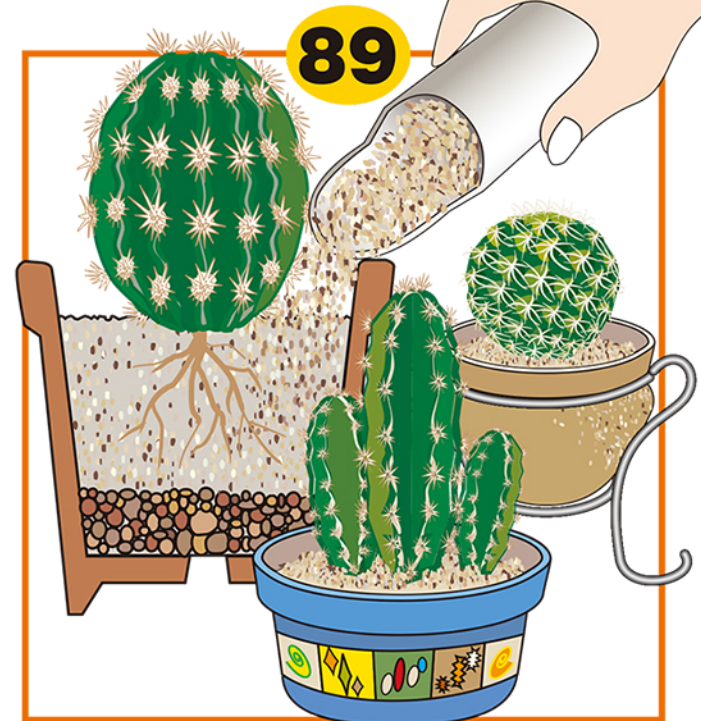
©無断転載は禁止します

サボテンの育て方

自分でやってみよう!

セキチュー
HOW TO D.I.Y

89



植物の中でも異彩を放つサボテンは、特に形の面白さで人気がありますが、もうひとつ育てやすいということもあげられます。というよりも、しばらくは放っておいてもけなげに育っているといった方が正しいのが現状だと思います。しかしそれでは少しずつだけ大きくなるだけで花も咲かず、いつのまにか水やりさえも忘れてしまうことになって、結局枯らしてしまうことになっているようです。

サボテンの面白さは、手をかけて育てないと分かりません。基本的な育て方を紹介しますので、一度チャレンジして花も咲かせてやってください。

Do it Yourself & Save

サボテンの基本的な育て方

1 土

サボテンは肥料で育てるのではなく、土で育てる——土に含まれている養分で育っていく——とされているほどで、一番重要なことです。保水力があって排水性のいい土を選んでください。桐生砂、腐葉土、赤玉土、パーミキュライト、鹿沼土、パーライトなどを混合してつくる一番いい土ができます。これは普通の観葉植物の土などと一緒です。

<配合例>

●根が丈夫で成長の早いサボテン——大型のウチワサボテン類や戸外でも育つ柱サボテン、球形類など。

荒目の桐生砂を日光にさらして殺菌し、粉を落とした畑土を同量混ぜたものか、それに1~2割ほど腐葉土を加えたものが最適です。

●一般の花を咲かせる球形種

桐生砂6~7、腐葉土3~4、これに燻炭(モミガラを焼いて泥炭を取り除いたもの)を1割ぐらい加えた土がよく、さらにそれにカキガラを0.5割ほど加えてもいいでしょう。または赤玉土3~4、桐生砂2~3、腐葉土2~3割という配合土もいいでしょう。

●根が弱く、生長も遅いサボテン

あまり一般の店頭には並びませんので、家庭では栽培が難しいので、なれるまでは手を出さないほうがいいでしょう。

2 肥料

サボテンは寿命が長いので、一般の植物のように1年単位で見ることにはできません。ですから肥料はあまり与えないで、良質の土の中の養分で育てるようにしましょう。2、3年で徐々に移植していくのがいい方法です。サボテンは土で育つというのはこのことで、肥料を与える場合も、移植のときに完全した鶏糞や完全発酵の油粕などの有機質の運動性のものを少量与えるぐらいがいいでしょう。ほとんどのサボテンは濃い肥料を嫌います。元肥を入れない場合は薄めた液体肥料を与えることもありますが、この場合も草花用の濃度をさらに10倍ぐらいに薄めたものを使います。



3 鉢

鉢もサボテンの生育に大きく影響しますので、鉢選びは慎重にしてください。直径と高さかまぼこ同様の浅めの鉢で、朱泥鉢か陶器鉢が適当です。素焼き鉢は乾燥が早すぎ、さらに乾くときに気化熱で用土が温まらないので避けたいほうがいいでしょう。逆に釉のかかった化粧鉢は乾くのが遅く、湿気が多すぎると欠点があるので、これもあまり向いていません。さらに鉢底の中央部が盛り上がっていて、周辺に水がたまるタイプの鉢も使わないほうがいいでしょう。底の鉢穴は大きい方が排水がうまくいきます。

育て方

●サボテンの植え替え

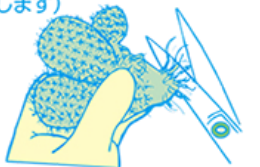
暖かい場所にずっと置いておくのであれば、一年中いつでも植え替えができます。タイミングとしては、鉢の中に根が張り出して、成長が鈍ってきたときや、用土の表面に青ゴケが出たり、水が長く土の上に止まるようになったときに、ひとまわり大きい鉢に植え替えてやります。(ちょっと小さいかなと思われるぐらいのほうが無難です)

<植え方>

①手で鉢をたたいて、手袋をつけた手ですっぽりと抜き取り、根からまわっている土を落とします。



②根をはさみで切り詰めます。(春は2~3cm、秋は3~4cmほど残します)



③鉢の底にアミを入れてから、鉢のかけらや小石を入れてから用土を少し入れます。



④用土の上に乾燥鶏糞を3号鉢で小豆大のものを4、5個入れ、その上に少し湿らせた用土を鉢の中ほどまで入れて、真ん中を少し高く盛り上げます。



⑤サボテンを片手に持って根を四方に広げながら、盛り上げた土の上に置きます。

⑥用土をサボテンのまわりに入れていきます。割りばしで用土をつついて、サボテンを安定させてください。



増やし方

●さし木

4~8月頃に切り取ったものを用土に乗せておくだけで発根してきます。

<さし木の方法>

トゲが痛いので、できたら作業用のゴム手袋を準備してください。

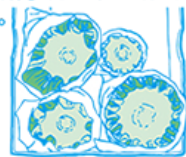
①切り取る部分のトゲをあらかじめハサミかニッパーで切り落とす。胴を消毒したよく切れる刃物で切断します。



②切り口のまわりを斜めにそぎます。これは切り口を中高にして、切断面が乾燥して凹んでも、根の出る部分が平らに近い状態になるので、発根した後の管理を楽にするためです。



③苗をティッシュで巻き(日焼けを防ぎます)、切り口を1週間ぐらい乾燥させてください(切り口だけを日光に当てます)。さらに湿度の少ない日陰で20日~1ヵ月ぐらいゆっくりと乾燥させます。



④普通の培養土の上にそと乗せて、根が出るまで日焼けを防ぐためにデュッシュをかぶせておきます。



⑤空の鉢に乗せて、切り口の部分を暗くしておくだけで、発根する場合もあります。これはサボテン自身に養分があり、生き伸びようとするから自然に根が出てくるもので、切ったそのまま日陰に放置しておいても根が出ることもあるほどです。



⑥根が1~2mmほど出てきたら、用土に植え付けて、たっぷり水を与えてください。

※切った元のサボテンは上部を切られると、横からたくさん子になる部分が出てきます。これは大きくなってからさし木にしてもいいでしょう、そのまま群頭株に育てて鑑賞用にしてもいいでしょう。



<子のさし木>

簡単に親からはずれる子は、そのまますぐにさし木すれば新しい株がで上がります。はずれにくいものは刃物で、親に傷をつけないように子を切り離してください。ゴム状の液がにじみ出てきた場合は、よく拭きとってからさし木してください。切り取った子の切り口は2、3日直射日光で乾燥させ、その後数日~10数日ほど陰干ししてからさし木します。



ウチワサボテンの増やし方

①表と裏にそれぞれ最低1本ずつトゲをつけた状態で何個かに切り分けます。

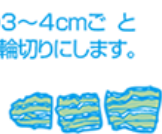


②用土にそれぞれ横たえておきます。下のトゲから根が出て、上のトゲからは子が出てきます。



柱サボテンの増やし方

①3~4cmごとに輪切りにします。



②一番上の部分は、胴切りと同じ方法でさし木にしますが、その他は上の部分を間違えないように乾燥させてからさし木用土の上に置きます。

